愛染院跡周辺整備活用計画

令和５年３月

三島市

目次

はじめに 1

1 概要 2

2 検討経過 8

3 対象地の将来像 10

4 整備の基本方針 11

5 整備活用方針 12

6 基本計画図及びイメージパース 14

はじめに

（１）趣旨

三島市の天然記念物「愛染院跡の溶岩塚」は、楽寿園、白滝公園と連携する緑地景観資源の一つであり、都市的施設としての役割を持たせた緑地として有効に活用していくことが課題となっています。

愛染院跡の溶岩塚に係る計画については、「第３次三島市都市計画マスタープラン（令和４年１月）」の第４章地域別構想において、「（都）三島駅前通り線と（都）南町文教線に囲まれた通称「溶岩塚」を含む緑地は、国の社会資本整備総合交付金制度の活用などにより、市民文化会館前の広場を含めて「ウォーカブル」な歩行空間や滞在空間の創出に向け、地区住民の意見を踏まえて整備を検討します」という整備方針が示されています。

また、令和３年度の景観重点整備地区「一番町三島駅前通り地区」指定の際にも地区住民から愛染院跡の利活用の提案がされています。そのほか、「三島市まちなかリノベーション推進計画（令和４年９月）」では「道路空間のリノベーション」、「エリアを楽しむコンテンツおよび休憩スペースづくり」が戦略に位置づけられています。

本計画は、当該地区の現状を踏まえ、愛染院跡周辺の活用に向けた整備の方向性や考え方を示すとともに、溶岩塚及び溶岩塚上の植生について、今後も適切な保全を図るための具体的な保全管理の考え方についても示しています。

（２）対象地

対象地は、三島市一番町地内に存する、(主)三島停車場線、（市）鎧坂線、（市）愛染院祇園線に囲まれた溶岩塚と樹木から構成される一帯の敷地とその周辺を対象とします。

位置図

Ⅰ 概要

（１）市天然記念物「愛染院跡の溶岩塚」

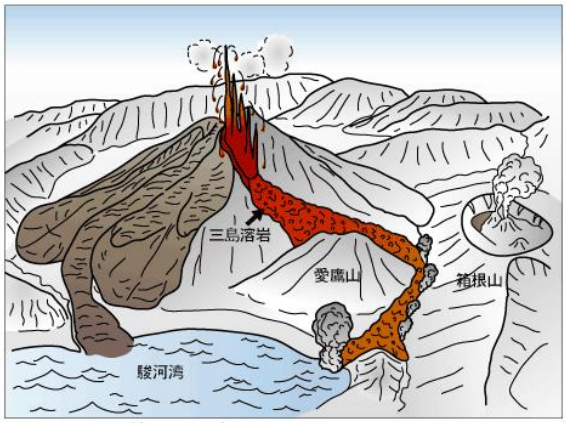
約 1 万年前に富士山から流れ出した玄武岩の溶岩流は、愛鷹山と箱根山の間の谷間を埋めて流れ下り、約40km南にある現在の三島の地を末端として、冷え固まりました。

対象地周辺の楽寿園や白滝公園等では、縄状溶岩（溶岩流がまだ流動性を保っている時に、その表面にしわが寄って縄が連なったようになった構造）や餅状溶岩、膨張でもちあがった溶岩塚を見ることができます。

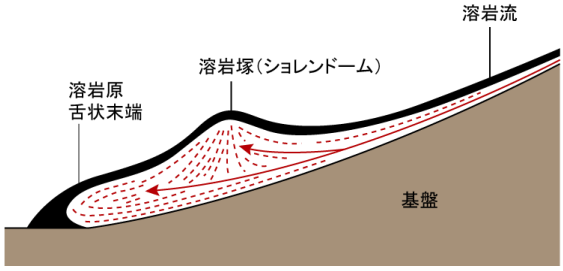
溶岩塚とは、溶岩流の末端部で、溶岩の流れがとまり表面から冷やされ固まりはじめたときに、後から追いついてきた溶岩の流れにより内部から突き上げられ、丘のようになったものをいいます。

愛染院跡には、この繰り返しによって、溶岩の堆積がいっそう高まり、このように小高い溶岩塚が形成されました。

愛染院跡の溶岩塚は、三島溶岩流の末端であること、また岩石や火山活動の研究に貴重であることから三島市天然記念物に指定して保存を図ることになりました。



鮎壷の滝三島溶岩を流出したころの富士山／(宮地直道による)
出典：静岡大学防災総合センターHP より



溶岩塚の形成

愛染院跡の溶岩塚

（２）歴史

ア　愛染院

愛染院は、真言宗に属し、かつては大寺院でした。江戸時代までは三嶋大社の別当寺（神仏習合思想に基づき、神社に設けられた神宮寺）として強い勢力をもっていました。

楽寿園の東側、愛染院小路の南側入り口付近のビル建設時に、長径 84cm、短径 79cm、厚さ 18cm の、燈明皿のような形をした楕円形の石造物（護摩石炉（ごまいしろ））が発掘されています。

愛染院の護摩石炉（ごまいしろ）
出典：石と生活（三島郷土資料館）より

三嶋大社北側の社家村（現在の大宮町）の裏側に護摩堂があったという記録から、大社境内の護摩堂を管轄していたと推測されています。また、鎌倉二代将軍源頼家が自筆した「般若心経」を蔵していたことがあったことからも、大寺院であったということができます。

イ　愛染院とその周辺の様子（江戸時代）

慶長６（1601）年に三島宿が東海道の宿場町として成立します。当初の町の範囲は伝馬町（三嶋大社南・東の地域）、久保町（中央町）、小中島町（本町）、大中島町（本町、広小路町）の４町であり、東海道（現在の（県）三島富士線）を中心として街が発展しました。寛永 15（1638）年には、六反田町・新宿町（広小路～加屋町まで）が三島宿に加えられ、その後も幾度か拡大されました。

東海道分間延絵図（下図）をみると、愛染院は東海道上の小中島町北側に位置し、三島宿内を流れる河川や水路にそそぐ池や湧水に囲まれていることがわかります。

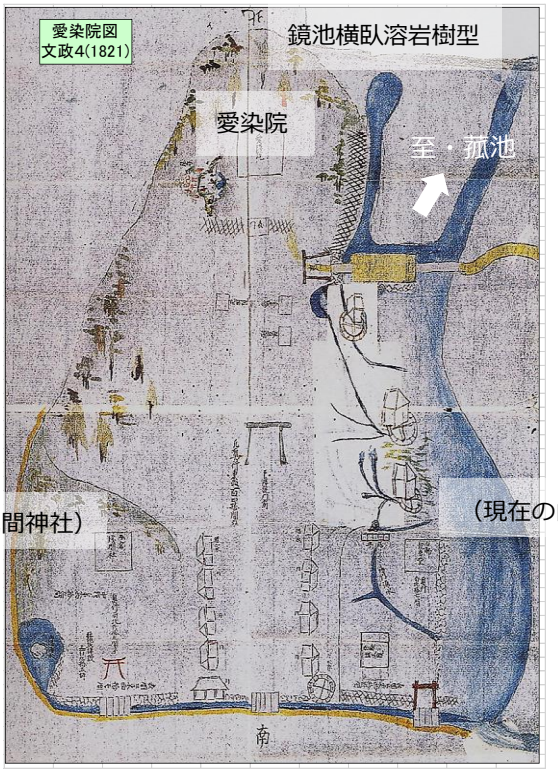
三島駅の開業以前は、三嶋大社のある東海道を中心に街が発展していたため、愛染院や楽寿園は、その賑わいあるエリアの奥に位置する、静かで自然豊かなエリアにありました。愛染院の周辺は、樹木の中に清水がこんこんと湧き、浅間神社、七面堂(しちめんどう)などの神社や寺院が点在する聖なる地であったことがうかがえます。

東海道分間延絵図　1806（文化３）年 東京国立博物館蔵

（拡大図）　　資料：「三島宿」（三島市郷土資料館）図録からの引用）

右図「愛染院図」は、約200年前の三島駅南から白滝公園、浅間神社にかけて一帯を描く貴重な絵図です。桜川が広く流れ、水車が4軒描かれています。

愛染院には3つの子院、門前には町屋が並び、白滝観音堂が川沿いに立っていました。



愛染院図　1821（文政4）年9月　矢田部家蔵
資料：「三島宿」（三島市郷土資料館）図録からの引用

ウ　明治以降の歴史

（ア）幕末～明治

愛染院は安政元（1854）年の安政東海地震によって倒壊したのち、明治元（1868）年に発令した神仏分離令の発令により再建が断念されました。

（イ）昭和初期

その後、愛染院庭山を含む公会堂（現在の三島市市民文化会館）周辺一帯には、学校（田方郡立三島高等女学校）や自動車教習所、児童遊園地が設立されたこともありましたが、昭和9（1934）年の東海道本線三島駅の移転・開業に伴い、三島停車場線が整備されたことで、昔の面影は留めなくなりました。三島駅開業に伴う道路整備時には、愛染院の岩山を撤去する話などが出ましたが、保存会による反対運動が起こり保存する方向となりました。

三島高等女学校（明治34年創立）生徒の記念写真の様子。溶岩塚の横に正門があった。
資料：静岡県立三島北高等学校同窓会HPからの引用

昭和9年。右の森は愛染院の築山、左手は三島高等女学校のあった場所。
資料：『三島・熱海・伊豆の国今昔写真帳』（郷土出版社）

（ウ）昭和 40 年代

同様に、昭和 40 年代にも交通関係者から撤去要望がでていましたが、市の取組みにより保存されることとなりました。

昭和 41（1966）年 2 月 7 日に市の天然記念物に指定されました。

（エ）昭和 59 年度

昭和 59（1984）年度に「国土庁水緑都市モデル地区整備事業計画」として、愛染院跡の溶岩塚、菰池公園、白滝公園、桜川歩道の整備を実施しました。その一環としてこの溶岩塚に高さ 4ｍの人工の滝が造られました。（現在は稼働していません。）

愛染の滝

■年表

年	出来事
１８５４ （安政元）年	安政東海地震による愛染院の倒壊
１８６８ （明治元）年	神仏分離令。愛染院の再建断念
１９０１ （明治 34）年	愛染院跡地から三島市民文化会館一帯に田方郡立三島高等女学校設立。 正門は溶岩塚の南側に、校舎は市民文化会館付近にあった。
１９２２ （大正 11）年	田方郡立三島高等女学校移管
１９３４ （昭和 9）年	東海道本線三島駅が現在の位置に開業。三島停車場線の整備
１９６６ （昭和 41）年	愛染院跡の溶岩塚が市の天然記念物に指定される
１９８４ （昭和 59）年	国土庁水緑都市モデル地区整備事業計画による整備

（３）現状と課題

ア　アイストップとなる高木（中景）

対象地は、見通しの良い道路中央(Ｙ字路)に位置し、ケヤキ等の高木が三島駅前交差点からもよく見え、アイストップになっています。

ボリュームのある高木の緑はどこから見ても目を引くシンボリックな景観です。

アイストップとなる高木

イ　溶岩塚の特殊な自然地形と小さな森

近づくと溶岩塚の岩肌や溶岩に根を張る高木の姿が見えます。木々が密集し日差しが入りづらいため、ひんやりとした空気が、かつてこの地が自然豊かな場所であったことを想像させます。

商業地で突如現れるこの自然景観は、意外性を感じさせつつも、「三島の豊かな自然」を象徴する景観です。

溶岩塚の特殊な自然地形と森のような風景

ウ　植物が繁茂し、溶岩塚の表面を見ることができない

溶岩塚から自然発生的に樹木が育ち、密集しているため、溶岩塚が草木に覆われ視認しづらくなっています。溶岩塚であることが容易に認識できるよう、植物の管理（伐採、剪定等）が必要です。

植物が繁茂し、溶岩塚が視認できない

エ　周辺道路を含めて動線が複雑

東側交差点は、溶岩塚が直接車道に面しており、一部歩行空間が確保されていない所があるほか、横断歩道と対象地内の歩道が接続されておらず、歩行者の安全性に欠ける部分があります。

また、駅方面から対象地へアクセスする場合のルートが限定されるため、訪れにくい場所になっています。

周辺道路を含めた円滑な歩行者動線の確保が求められます。

東側交差点部

オ　溶岩塚の価値や愛染院の歴史が伝わりにくい

溶岩塚付近に「愛染院跡の溶岩塚」の説明サインが設置されていますが、この場所の歴史や自然の特異性を伝えるには不十分です。関心を持てるわかりやすい説明内容や容易に視認できる適切な配置場所が必要です。

既存の説明サイン

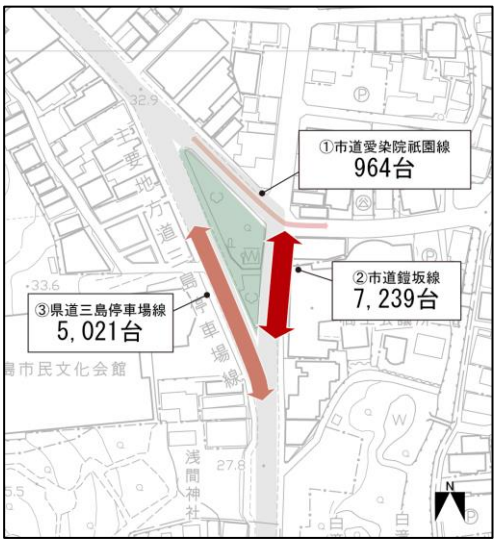
カ　溶岩塚と調和しない工作物や道路交通標識、誘導サインが乱立

対象地には、信号機や道路交通標識をはじめ、交通安全の像やハートのオブジェなど、自然景観と調和しない様々な工作物が見られます。雑多な印象を受けるため、工作物の撤去や道路交通標識、公共サインの整理が必要です。

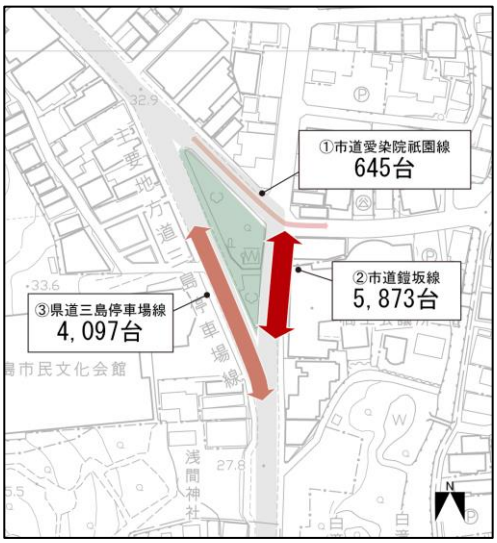
北側から見た対象地

キ　落ち着いて滞在できる空間が少ない

対象地は周囲を道路に囲まれています。対象地西側の（主)三島停車場線と東側の（市）鎧坂線は幹線道路であり、比較的交通量が多いため、対象地内で落ち着いて過ごせる空間（スペース）が限られています。



平日の交通量



休日の交通量

調査名：(都)下土狩文教線建設事業に伴う交通量調査業務

2 検討経過

本計画の策定にあたっては、地元の一番町まちづくり委員会と、三島市景観審議会委員、三島市文化財保護審議会委員、三島商工会議所、三島市観光協会、まちなかリノベーション研究会、三島ゆうすい会などの関係団体、地元出身の大学生、三島市観光アンバサダー及び市職員の計 23 人をメンバーに、「愛染院跡周辺環境整備に係わるワークショップ」を開催し、三島市景観審議会副会長を務める学識経験者にアドバイザーとして参加いただきながら、整備活用計画を策定するために必要な整備や活用イメージの検討を行いました。

第１回ワークショップの様子

第２回ワークショップの様子

（１）整備活用計画に係る検討の経過と概要

■開催日程

回数	開催日	主な検討内容
1	令和４年 9月 7日（水）	愛染院跡周辺地の現状・課題について
2	10月11日（火）	対象地の将来像と活用イメージについて
3	11月11日（金）	整備イメージの検討
4	令和５年１月11日（水）	整備イメージ案（事務局提案）の検討
5	2月 8日（水）	整備案（最終案）の確認

ア　第１回

第１回目は、対象地の概要（自然、歴史、交通環境、街並環境等）を共有した上で、現状・課題について意見交換しました。（主な意見は、前述（P6～7）の（３）現状と課題に示すとおりです。）

イ　第２回

第２回目は、現状・課題を踏まえた上で、対象地の「将来像」や「活用イメージ」について意見交換しました。

将来イメージについては、“自然や歴史を象徴する場所にしたい”、“溶岩塚を活かし、もっと魅せるべき”、“居心地の良い空間や目に留まる魅力的な景観を創出したい”、“新しいスポ

ットとして再生したい”など、多くの意見が聞かれました。

活用イメージについては、“ベンチ等を置いた休憩場所”、“ジオツアーなどの環境学習の場”、“白滝公園や浅間神社等の周辺施設と連携したイベントに活用していきたい”などの意見がありました。

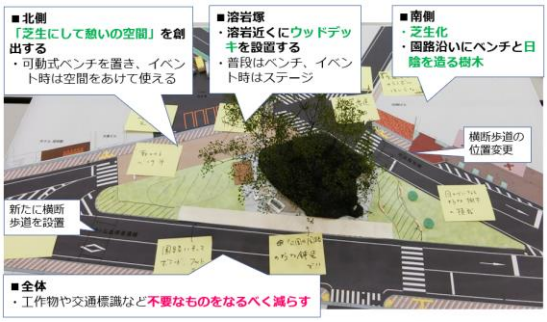
ウ　第３回

第３回目は、第２回の将来像や活用イメージを踏まえ、具体的な整備イメージを溶岩塚の模型を使いながら検討しました。

対象地の“落ち着いて滞在できる空間が限られている”という課題に対しては、第２回目において、“市道愛染院祇園線を活用して敷地を拡大できないか”という意見が出たことから、敷地３パターン（市道愛染院祇園線の①現状道路の活用型、②一方通行による敷地拡大型、③廃道による敷地拡大型）で整備イメージを検討しました。

その結果、自由な発想のアイデアが多く出されるとともに、空間の具体的な使い方（溜まり空間、動線、公共サインの位置等）についてイメージを具体化することができました。

発表の様子



例）具体的な整備イメージの検討結果

エ　第４回

第４回目は、第３回目で出た様々なアイデアをもとに、事務局でたたき台となる整備イメージ案を３つ（散策型、イベント型、体感型）提案しました。

各案の良い点や改善点について意見交換した上で、最終的に１案に絞っていただき、A 案の散策型が選ばれました。主な理由として、散策型は、“動線を敷地中央に引くことで溶岩塚に気軽に立ち寄りやすくなる”などの意見が挙げられました。また、イベント型は、“敷地が狭いため無理にイベント利用する必要はない”、体感型（地下を掘ったすり鉢状の場所で子どもを遊ばせる）は、“溶岩塚をより際立たせるアイデアは採り入れたいが、この場所で子どもの遊び場を作ることは危険”といった意見がありました。

オ　第５回

最終回となる第５回目は、第４回目の意見を踏まえて修正した整備案を提示すとともに、対象地の将来像、整備の基本方針、整備活用方針の最終案を提示し、意見交換しました。

3 対象地の将来像

対象地の自然や歴史、景観特性や現状課題、「愛染院跡周辺環境整備に係わるワークショップ」での検討結果を踏まえ、対象地の将来像を次のように掲げ、整備活用計画へと繋げていきます。

溶岩塚とシンボルツリーが迎える
心地よい休憩スポット『愛染院跡（仮称）』

～三島の自然と歴史を象徴する新たな風景づくり～

市天然記念物「愛染院跡の溶岩塚」は、三島溶岩流の末端地であることを示す、貴重な自然資源です。その溶岩塚の上には、小さな森のように高木が育ち、三島駅からのランドマークとなっています。

また、周辺はかつて豊かな森の中で清水がこんこんと湧き、社寺が点在する聖なる地に三嶋大社の別当寺「愛染院」があったことは、本市の歴史や自然環境を知る上で貴重な場所です。

これらの貴重な自然資源や歴史を継承し、「愛染院跡（仮称）」を休憩スポットの「愛称」として活用するとともに、文化財である溶岩塚を活かし魅せるよう改善し、周辺施設との連携、市民と行政の連携により、三島南口の新たな憩いの場となる“愛染院跡（仮称）”づくりを進めていきます。

4 整備の基本方針

将来像の実現のための整備の基本方針（コンセプト）は、次のとおりです。

1　溶岩塚や高木を保全し、溶岩塚の存在感やシンボル性を高めます

2　心地よい空間と溶岩塚が調和した美しい景観を創出します

3　愛染院の歴史や三島の成り立ちについて、その価値と魅力を伝えます

4　周辺施設と連携しながら、まちなか散策や、道路との一体利用によるイベント等を楽しめる場所として活用を目指します

5 整備活用方針

整備の基本方針（コンセプト）に基づく、整備活用方針は、次のとおりです。

1　溶岩塚や高木を保全し、溶岩塚の存在感やシンボル性を高めます

（１）整備方針

ア　市天然記念物である「愛染院の溶岩塚」の視認性を確保するとともに、高木を含む残置木のシンボルツリーとしての価値を活かすため、「愛染院跡周辺保全計画※」に基づき、対象地内の樹木を整備（伐採・保全）します

※愛染院跡周辺保全計画では、溶岩塚の植物管理の考え方について、「文化財である溶岩塚の視認性」、「シンボルツリーとしての価値の活用」、２つの視点で整理し、管理の針として整理しています。

2　心地よい空間と溶岩塚が調和した美しい景観を創出します

（１）整備方針

ア　ベンチを置き、心地よく休憩できる場所や“歩きたくなる”園路をつくります

イ　園路はスムーズな動線を確保し、周辺の横断歩道の移設を検討します

ウ　溶岩塚周辺は自然素材等を使用し、溶岩塚と調和したデザインとします

エ　対象地が「交通島」に見えないよう、（市）愛染院祇園線の美装化により、道路と対象地が一体的に見える工夫をします

オ　溶岩塚と調和しない工作物の撤去や道路標識の整理により、すっきりとした景観形成を図ります

カ　夜間照明は、人が安全・安心して滞在でき、品格や落ち着きを持った明るさで溶岩塚や園路を魅力的に演出します

夜間照明のイメージ例）

照明ベンチ

フットライト

溶岩塚の照明（クロスライティング）

３　愛染院の歴史や三島の成り立ちについて、その価値と魅力を伝えます

（１）整備方針

ア　案内サインや説明サインの内容を充実させることにより、地学・歴史的価値を伝えます（歴史説明サインは、古地図※を表示し、古地図の方角と同方向に設置します）

説明サインのイメージ例）

対象地周辺の街路変遷図

愛染院の歴史（古地図表示）

※愛染院図や
東海道分間延絵図等

溶岩塚の成り立ち（ジオスポット）

（２）活用方針

ア　自然・歴史の観光スポットとして紹介、情報発信するとともに、学校の総合学習やジオツアー等の場所として活用するなど、広く周知を図ります

歴史ツアー

４　周辺施設と連携しながら、まちなか散策や、道路との一体利用によるイベント等を楽しめる場所として活用を目指します

（１）活用方針

ア　周辺施設（文化会館、楽寿園、白滝公園、浅間神社等）と連携したまちなか散策やイベント時の休憩スポットとして活用します

イ　対象地と道路（（市）愛染院祇園線）を一体的に利用することでイベントに活用できるよう、（市）愛染院祇園線の一時的な歩行者天国を検討します

公共空間を活用したイベント

6 基本計画図及びイメージパース

整備活用方針に基づく、整備イメージは、次のとおりです。

北側敷地　整備イメージ

南側敷地　整備イメージ